

「牧師室」(2016年5月8日)

先週に続き、小熊英二の『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』を取り上げます。ある日本兵とは著者父親のことです。シベリアの捕虜生活は、零下45度の極寒の生活であり、屋外の作業のため空腹と栄養失調と寒さと疲労のために、つぎつぎに死者が出た、と言う面と、捕虜生活1年後には、ゆとりが出て来て壁新聞の発行が始まったと言われています。しかし、同時に「軍隊」としての性格上「しごき」があり、一人の兵士が集団で暴行を受けた事実も報告されています。

1948年に入ると捕虜たちの帰国が始まりますが、郷里に帰った時、家族を含め、人々は自分たちを想像していたほどには、歓迎してくれなかった、と言う記述には、心が痛みました。その後の父親の生活は、仕事を求めて転々とし、更に、結核に罹患します。そこでは、クリスチャンの慰問を受けたりします。著者である小熊英二は、さまざまな質問の最後に、人生の苦しい局面で、もっとも大事なことは何だったかを聞いたそうです。すると「希望だ。それがあれば、人間は生きていける」、そう父親は答えたそうです。父親は戦後43年を経て、再び捕虜生活を送ったチタを再訪、収容所跡地の近くで撮影された写真が本書に掲載されている。どんな思いでその地に立たれたのだろうか？